

風のように

甘木教会



牧師：竹田孝一

7:14 アモスは答えてアマツヤに言った。「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。7:15 主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた。アモス7：14-15

7わたしたちはこの御子において、その血によって贖われ、罪を赦されました。これは、神の豊かな恵みによるものです。

エフェソ1：7～8

6:14 イエスの名が知れ渡ったので、ヘロデ王の耳にも入った。人々は言っていた。「洗礼者ヨハネが死者の中から生き返ったのだ。だから、奇跡を行う力が彼に働いている。」

マルコによる福音書6：14

【説教要旨】 罪の深さ

「超越的なものへの畏敬の心を失うとき、人間は自己抑制を失い、節制、禁欲を忘れて無制限の物質的、肉体的快樂主義におちいる。超越的規範を失う時、社会的連帯は失われてしまうのである。

これが現代文明社会に内在する病根ではないかと考えさせられる。（『未来をきり拓く大学』より）」と今から50数年前に語った武田清子氏の言葉です。

今回の都知事選挙でまさにこのことが露出したのではないのでしょうか。選挙ポスター騒ぎ、そして選挙結果で市長をしていたときにいろいろな高圧的態度をとって裁判でも負けている人が多くの票を集めるという恐ろしい結果です。

繁栄している北の国イスラエルが滅びゆくと言者アモスは、預言します。「主はこう言われる。ユダの三つの罪、四つの罪のゆえに／わたしは決して赦さない。彼らが主の教えを拒み／その掟を守らず／先祖も後を追った偽りの神によって／惑わされたからだ」と人間が神から離れて罪に陥ったことだとはっきりと語りました。繁栄と力の裏では、イスラエルという国が芯まで墮落しきっている事をアモスは知っていました。アモスが裁きのメッセージを語った罪の数々は、御言葉に対する無関心、偶像崇拜、異教崇拜、むさぼり、墮落した政治と貧民層のしいたげ等、広範囲に渡りました。超越的なものへの畏敬の心を失い、人間は自己抑制を失い、節制、禁欲を忘れて無制限の物質的、肉体的快樂主義におちいる。超越的規範を失い、社会的連帯は失われ、社会に内在する病根が蔓延していました。しかし、彼の言葉は、当時の人、現代人に嘲笑されても受け入れられるはずありませんでした。

アモスは、「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。」彼は預言者や祭司の息子でも何でもありませんでした。アモスは羊飼いでユダに住んでいるただの農夫だったのです。こんな彼に誰が耳を傾けるのでしょうか？しかし、「主は家畜の群れを追っているところから、わたしを取り、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と言われた。」アモスを神は召し出し、神の力強い言葉を語る声となって用いられていったのです。

私たちが、どういう血筋で、学問があるかないかということではなく、神は、その時代において最も必要な神の声を語りかけていくように、一人一人を召し出すのです。

「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない。わたしは家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。」だとしても、それは、神にとって関係のないことなのです。たとえそうであっても、私たち一人一人は、「キリストにおいて、あなたがたも共に建てられ、霊の働きによって神の住まいとなるのです。」とあるようにたとえそうであっても、私たちは神の働きによっ

て私たちが立てられ、神の宮、つまり神がお住まいになるほど神のものとされているのです。

今日の福音書の日課は、ヘロデ大王が自分の正義を貫こうとすると洗礼者ヨハネが邪魔です。しかし、矛盾するのですが、19そこで、ヘロディアはヨハネを恨み、彼を殺そうと思っていたが、できないでいた。20なぜなら、ヘロデが、ヨハネは正しい聖なる人であることを知って、彼を恐れ、保護し、また、その教えを聞いて非常に当惑しながらも、なお喜んで耳を傾けていたからである

この矛盾が人間の罪の深さです。4少女が座を外して、母親に、「何を願いましょうか」と言うと、母親は、「洗礼者ヨハネの首を」と言った。25早速、少女は大急ぎで王のところに行き、「今すぐに洗礼者ヨハネの首を盆に載せて、いただきとうございます」と願った。26王は非常に心を痛めたが、誓ったことではあるし、また客の手前、少女の願いを退けたくなかった。27そこで、王は衛兵を遣わし、ヨハネの首を持って来るようにと命じた。衛兵は出て行き、牢の中でヨハネの首をはね、28盆に載せて持って来て少女に渡し、少女はそれを母親に渡した。人間の罪の深さがはっきりとえぐり出された醜い物語は、その時代の病根を表しています。それは今も同じです。

「超越的なるものへの畏敬の心を失うとき、人間は自己抑制を失い、節制、禁欲を忘れて無制限の物質的、肉体的快樂主義におちいる。超越的規範を失う時、社会的連帯は失われてしまうのである。これが現代文明社会に内在する病根ではないかと考えさせられる。」。そういう現代だからこそ、「主よ、この時代に平和をください。我らを守る者は、主の他にはない。主は神であるから」と信じるこの小さな、力ない者、私たちは、語ることが嘲笑され、受け入れられなくても、小ささ、力なきに怯み、怖気づくのではなく、小さい力なき者を、神は、キリストにおいて、私たちともに建てられ、霊の働きによって神の住まいとされ、『行って、わが民イスラエルに預言せよ』と命じられています。

日毎の糧

85:10 いくつしみと、まこととは共に会い、義と平和
とは互に口づけし、
詩篇85:9—10



ルターの言葉

ああ主よ、私はあなたの罪です。あなたは私の義です。
だから私は勝利を得、安全であります。私の罪はあなた
の義にまさることはありませんし、またあなた
の義は私を罪人とせず・・・ 『ルターの祈り』 石居正己編訳 聖文舎

異質なものが同居

「いくつしみと、まこと」、「義と平和」という対をなしている言葉に北森嘉蔵牧師は注目します。

「義と平和」、立派は立派ですが、義は正しさを追求する人はあまりに独善的になり、平和の破壊者になります。平和至上主義は空論になる。世界を見るとロシア、中国、米国の指導者はそれぞれの論理で義を追求しているのですが、平和を破壊して世界を不安定にしています。国連は平和、平和と言いつつなかなか国連の姿をとりもどせず、妥協します。

「いくつしみと、まこと」も同様で、共に会わない場合があるというのです。

この異質なものが、共に会い、互いに口づけするというのが聖書の世界だというのです。

パウロは全く逆の、「弱さと強さ」を強調します。「わたしは弱いときにこそ強いからです。」と。互いに会う、互いに口づけできそもない異質なものが互いに会い、口づけする、「イエス・キリストによってもたらされた賜物の一つは、いくつしとまことが共に会い、義と平和とが互いに口づけしたということではないでしょうか」①

①「詩編講話 下」

北森嘉蔵 教文館

祈り：目を上げて、わたしはあなたを仰ぎつつ神の憐みを待ち望む信仰が与えられますように。アーメン。

牧師室の小窓からのぞいてみると



今回の都知事選挙で感じ、思い出したのは倫理社会の授業で聞いた言葉である。民主主義の崩壊は、衆愚、民が愚かになることだと。まさに、民の劣化であると思う。SNSによる民への煽りと煽られた者が考えずに行動を起こすということである。

「この世の子らよりも、賢くあれ」と言われたイエスさまの言葉が強く聞こえてきた。たとえ世の中がどうであって神と向かいあって、神の言葉を聞き、今をどう生きるかということを実際に聞くときであり、み言葉によって自分の足元を照らし歩むことだと思った。

今こそ、私たちキリスト者が、「地の塩、世の光」とされていくことを強く祈る時が今なのです。

愚かな人とならないためにも。

園長・瞑想？迷走記

九州地区筑後地区の園長会があった。「小学校の運動会の日程を統一してほしい」という真剣な、おもしろい提案があった。各小学校がバラバラでは確かに幼稚園の運動会の日程を決めづらい。しかし、何度、教育委員会、小学校へお願いしても改善しないということであった。

そこでの雰囲気は、日程が決めづらい、申し出を聞いてくれないという困ったというものであった。困っただけでは申し出は聞いてくれないだろう。現在、幼稚園から小学校へ教育の切れ目ないつながりを大切にしていこうという幼小連携ということが、国の方策である。とするなら教育のひとつである運動会をどうつなげていくかという内容を小学校と話し合った方が、運動会の日程も自ずと議論されるのではないかとふと思った。私たち幼稚園も日ごろのことで精一杯で、つい幼小連携という視点を忘れていたことがある。



甘木通信

国際基督教大学出身の聖職者、牧師の手記、「われら主の僕 リベラルアーツの森で育まれて」という本を読む。同級生のM牧師の手記もあり懐かしく読んだ。戦後の占領政策でゼロ戦を作った中山飛行場の跡地にこれからのアジアをリードする人材を養成するために国際基督教大学を作り、その周辺に日本にあった神学校を作ろうとした。それに応えたのが東京神学大学、ルーテル神学大学だった。国際基督教大学の食堂、キャンパス、運動場を利用していた。私も食堂でアルバイトしていたし、国際基督教大学の友人と毎朝、祈り会をしていた。彼は韓国の学生が食堂でアルバイト始めて困っていないだろうか思い自ら手を上げて直接、食堂と交渉して働いた良き、純な人であった。徴兵、従軍が日本では遠くなっていた時代にその韓国の友人はベトナムに従軍していた。本を読みいろいろな思い出が脳裏に浮かんだ。



その中で鉄の学者武田清子氏の一文がある。「超越的なものへの畏敬の心を失うとき、人間は自己抑制を失い、節制、禁欲を忘れて無制限の物質的、肉体的快樂主義におちいる。超越的規範を失う時、社会的連帯は失われてしまうのである。

これが現代文明社会に内在する病根ではないかと考えさせられる。（『未来をきり拓く大学』より）」今も響くことであり、この教え子が献身している。

(甘木日記)土) 甘木教会に夕刻、向かう。駅まで迎えに来てくださり感謝。主日の準備。**日)** 朝から庭の掃除、花への水遣り。シャツの汗がしぼれる。午後から久留米教会の役員会出席。**月)** 熱中症対応で気を使う。**火)** 筑後地区幼稚園園長会であった。幼稚園の置かれる環境での園児の教育、保育をどうするのかということより、行事をどうするかということになっているような感じがした。**水)** 朝からバタバタして一日が終わる。雨も止み、曇り。このままに明日もおさまって欲しい。**木)** 今日強い雨が降ったりやんだりしたりし、職員が病気、先生が研修、色々と教育・保育内容を変更しなければならなくなる。**金)** ほとんど終わっているが総会資料の準備をしなければいけない。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。 ぐちらない聖人（牧師）もいますが。



土) 衣替えをした結果、ズボンが古くなり、朝、日差しの強い中をショッピングセンターに行く。昼から甘木に行くのも危険と夕刻を待つ。そんなとき甘木から電話があり「駅まで迎えにいきますから出る時、電話をしてください」嬉しい電話をいただく。夕刻に向かうが暑さが残る。主日の準備。干していたドクダミも乾燥しお茶に出来る。日) 礼拝も終わり、甘木の駅まで送っていただき、久留米教会の役員会に向かう。暑すぎて教会までタクシーで向かう。役員会后、園庭の花に水を撒き、家まで車で送っていただく。多くの人に助けられている。月) 熱中症アラートが危険指数になり、外遊び、プールを中止。凄い時代である。中止の保護者への手紙、職員会議をスムーズにいくための資料作りとパソコンの前にいる。そんな時、熱中症と思われる先生が出て、経口飲料、冷えピタ買い求めに出たり、寝るように指示したりして「熱中症対策。暑い中を15年ぶりに久留米に帰って来たという卒園生の青年が幼稚園に立ち寄ってくれた。110年の歴史は人を生む。前幼稚園で職員配置してきたが急に主任が担任になったと聞く。真面目な方でこの暑さで疲れていないかと思いを馳せる。火) 筑後地区幼稚園園長会、認定こども園園長会に出席。創世という会場であった。ここは同級生のk牧師が結婚式をあげた。それ以来である。ここを創設したk兄はルーテル教会を代表する信徒であった。礎石が聖句であった。ここでも全日私幼稚連の会長が福岡から選出されたという報告。そんなことよりも時間を惜しんで、深く幼児教育について勉強し、取り組む真摯な会議であって欲しかった。足元が揺らいでいる大変化の時代、時はない。なぐさめに優しい味の「なかむら」の700円の定食を食べる。ふらっと天神へ。水) 昨日を引きづって気が重い。朝からばたばたしている。早めに幼稚園を引き上げる。途中で納骨堂前を飾る花の苗と会堂の横にアクセントになるためにトルコ桔梗花の苗を購入。木) 昨日、求めた苗を納骨堂の前のプランタに植える。もう少し死者を大切にしたいものだとブツブツ。このブツブツにいけない、いけないと反省。雨も降り、根づきに良いだろう。金) やっと一週間が終わるといふとき、夏の当番表の作成など事務作業がいっぱい。運動会のプログラムが大変で夏休み忙しいというが、忙しさは敵です。忙しいと運動会よりも先生の休養が大切。

